

子どもの目撃証言能力を規定する要因に関する研究

—外部情報のソースモニタリング能力に関する実験的検討—

(中間報告)

広島大学大学院 近藤 綾

【キー・ワード】 幼児, ソースモニタリング, 記憶の発達

問題と目的

子どもの目撃証言能力に関わる基礎能力を明らかにし、周知させることは、裁判員制度が始まることを考慮すると極めて重要な課題である。証言に必要な能力の1つに、ソースモニタリング能力がある。これは、自分が知っている知識をどのようにして獲得したのかについて、情報の起源を認識する能力である(Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993)。

子どものソースモニタリング能力に関する研究は、目撃証言能力や虐待の報告に関わる重要な能力であることから、近年欧米においては活発な研究が行われている。そして、この能力は4-6歳の幼児期に発達することが報告されている(e.g., Lindsay, Johnson, & Kwon, 1991)。一方、我が国においては成人を対象とした研究が増えつつある段階にあり、子どもを対象とした研究はほとんど行われていない。しかし、我が国においても子どもが事件を目撃し証言する例は決して少なくはなく、虐待の報告は年々増加の一途をたどっている(仲・上宮, 2005)。よって、子どものソースモニタリング能力の発達について言及していく必要性がうかがえるだろう。

Johnson et al. (1993)は、ソースモニタリングを、リアリティモニタリング、内部情報のソースモニタリング、外部情報のソースモニタリングの3種類に分類し、理論的枠組みを提唱している。中でも、外的な2つの情報の起源を区別する外部情報のソースモニタリングは、Roberts (2002)によって次の2種類に分類される。1つ目は、2つの出来事を情報源として区別するものである。これは、ターゲットとなる出来事の前や後に別の出来事が提示され、2つの出来事についてのソースモニタリング能力を検討する。2つ目は、1つの出来事の中での2つの情報源(例えば、発話者・行為者・発信源)の区別を行うものである。

1つの出来事の中での2つの情報源の区別を行う外部情報のソースモニタリング能力に関する子どもを対象とした研究は、欧米においても少なく、いまだ基礎的検討に留まっている。この能力に関して、近藤(印刷中)は、提示する情報の種類がソースモニタリングの正確さに及ぼす影響について発達的に検討した。すなわち、年少児、年中児、年長児(4-6歳児)に対して、学習時に各年齢の参加児の半数には男性と女性の各音声で単語を提示する単語課題を提示し、残りの半数には自己紹介という状況の中で(初めにあいさつや名前が聞かされる)発話者に関する文情報が提示される自己紹介文課題を提示した。続くテスト時ではソースモニタリングテストを行い、“男性の声で聞いた”, “女性の声で

聞いた”，“男性と女性の両方の声で聞いた”，“どちらの声でも聞かなかった”，の4つの項目から情報源となる発話者を特定させた。その結果，年中児以降では単語課題よりも自己紹介文課題のほうが成績が良く，提示する情報の種類によりソースモニタリングの正確さが異なることが示唆された。また，どの年齢においても男性と女性の両方から情報が提示されたと判断することが難しいことが明らかとなった。

しかし，近藤(印刷中)で比較された2課題の差異は，以下の点について明らかでない。すなわち，単語と文という情報量による差異なのか，自己紹介という文脈状況による差異なのか，ということである。いまだ明らかとされていないソースモニタリング能力の発達のメカニズムや，目撃事態等を含む現実場面に対して有益な示唆を与えていくことの重要性を考慮すれば，この点について明確化しておく必要があるだろう。

そこで，本研究では，近藤(印刷中)で明らかとされていない点について検討し，幼児のソースモニタリング能力の発達に関するより詳細な言及を行うことを目的とする。具体的には，近藤(印刷中)で提示された2つの課題に，自己紹介という文脈状況の中で単語が提示される「好きな単語課題」と，発話者に無関連な文情報が次々と提示される「文課題」とを加えて再分析し，年齢や4つの課題間を比較することで，幼児期のソースモニタリングについての発達の言及を行う。なお，本中間報告では，「好きな単語課題」と「文課題」を選定するために実施した予備調査について報告する。

予備調査

本研究で扱う外部情報のソースモニタリング能力を検討するにあたって，学習時に提示する情報は，幼児が理解できる内容である必要がある。また，使用する音声刺激は明瞭でなければならない。そこで，本研究で使用する2つの課題を作成するために予備調査を実施した。

刺激語 「好きな単語課題」と「文課題」で提示する刺激語は，近藤(印刷中)の課題で使用された全ての単語(32単語)をもとにした。なお，これらの単語は全て幼児が知っている単語と確認されているものである。本課題前に実施する練習課題では全ての幼児に単語が提示されるため，32単語のうち練習課題で使用される12単語を除いた20単語について，各課題で提示する刺激語を作成した。

「好きな単語課題」では，自己紹介という状況の中で単語を提示する課題を作成した。提示する単語は近藤(印刷中)の単語課題を使用し，単語を提示する前に各発話者が自分を紹介する内容は，近藤(印刷中)の自己紹介文課題で最初に提示する内容に沿って作成した。つまり，自己紹介文課題において提示する，“みなさんこんにちは。僕/私の名前は・・・です。これから僕/私の紹介をします”という内容を，“・・・これから僕/私の好きなものを言います”という表現に変更した。

「文課題」は，各文が発話者に無関連な情報となるように，20単語をキーワードとして含めた20文を作成した。つまり，自己紹介文課題では，発話者に関する紹介文(例えば，好きな食べ物はカレーライスです)を作成したが，「文課題」では単なる文(例えば，カレーライスには色々な野菜が入っています)を作成した。その後，各文を幼児が理解できるかについて確認するために，年少児10名(平均3歳7ヵ月；範囲3:6-3:9；男児5名，女児5名)に対して，実験者が1文ずつ質問形式で文を読

み上げ、反復・応答させた。その結果、全員が適切に答えられた 20 文を採用した。

音声刺激 選定された刺激語は男性と女性の音声で提示するため、続いて音声刺激を作成した。音声刺激は、男性と女性の音声を IC レコーダー (SONY ICD-P30) で録音した。なお、各刺激語は約 3 秒間隔で録音した。録音後、実験者は各音声を PC (SONY VAIO VGN-TX50B) に取り込み、音声編集ソフト (Pratt) で編集した。その後、作成された音声刺激が正確に聞き取れるかについて確認するために、成人 10 名 (平均 21 歳 0 ヶ月; 範囲 19:8-22:6; 男性 5 名, 女性 5 名) に対して、2 つの課題の男性と女性の音声を提示した。その結果、全ての成人が問題なく聞けたことを報告した。よって、次に年少児 10 名 (平均 3 歳 7 ヶ月; 範囲 3:6-3:9; 男児 5 名, 女児 5 名) に対して、発話者が各刺激語を発した直後に反復させる方法で聞き取り具合を確認した。その結果、全員が刺激語を正確に反復できた。以上の手順により、本研究で使用する課題を決定した。これらを用いて、今後は本調査を実施する。

文 献

Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. (1993). Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.

近藤 綾 (印刷中). 発話者を特定する外部情報のソースモニタリング能力に関する発達の研究: 自己紹介課題を使用した検討 発達心理学研究, 20.

Lindsay, D. S., Johnson, M. K., & Kwon, P. (1991). Developmental changes in memory source monitoring. *Journal of Experimental Child Psychology*, 52, 297-318.

仲 真紀子・上宮 愛 (2005). 子どもの証言能力と証言を支える要因 心理学評論, 48, 343-361.

Roberts, K. P. (2002). Children's ability to distinguish between memories from multiple sources: Implications for the quality and accuracy of eyewitness statements. *Developmental Review*, 22, 403-435.

